

情報求む——ミシンの歌

生活科学部 生活環境学科 准教授

大川 知子

いち早き針の運びの進みにも

開けゆく世のあとを見るかな

ある日、ひとりの学生が研究室にやって来た。「先日、東京農工大学の科学博物館で説明をして下さった小林さんが、下田先生がこういう歌を詠まれているので、皆さんも知っておきましょうと仰って、先生にもどうぞ、と預かりました」とコピーをくれた。そこに書かれてあったのが、この歌だ。当日、私は別のグループを引率しており、その場に居合わせていなかった。後日、小林さんを訪ね、御礼を申し上げた。

日本の繊維技術の発展に対し、東京農工大学は研究のみならず、産業界に優秀な人材を多数輩出していることでも知られている。創基1886年(明治19年)、2012年にリニューアルオープンした科学博物館は、もはやここ以外では現存しない繊維機械を所蔵している。この博物館では、毎週火曜日と土曜日に繊維技術研究会に所属するボランティアの方たちが、実際に展示機械を動かして見せて下さる。長くその道に従事されてきた、一流の技術者の方たちだ。毎回、とても丁寧に説明して下さい、また昔の機械だからこそ、モノ作りの原理原則を深く理解することができる。学生たちにとっても貴重な機会だ。

展示品は、日本の経済発展を支えた絹製品を作る機械が中心だが、2Fの奥にミシンのコーナーがある。ここを担当されているのが、小林成夫さんだ(写真)。繊維技術研究会発足以来、ボランティアとして従事されている。博物館では、数百台を越えるミシンを収蔵しており、その保有数は世界でもトップクラスなのだそうだ。この保存に関して、小林さんがこれまでのキャリアで蓄積されてこられた知識と経験が存分に発揮されている。



学生に説明して下さる
小林成夫さん

小林さんは、長年、シンガー社で仕事をされてきた、同社の伝説的技術者である。小林さんがこの下田先生の句に出会ったのは、或る書物だった。彼の興味は、この句がいつ詠まれたものなのか、ということである。博物館の見学は、大勢の場合、事前予約が必要だ。この日に実践女子大学の学生が来る一、ということで、小林さんは「この歌のことを知らせたい」とコピーを準備して待っていて下さった。

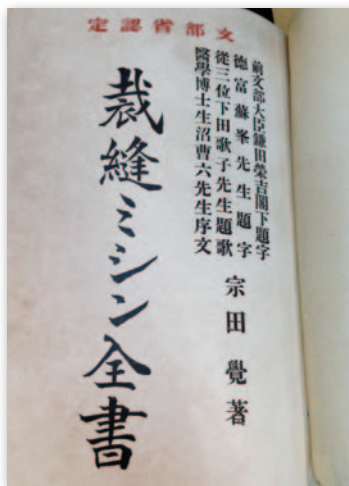
早速、下田歌子研究所に問い合わせたものの、判明しなかった。ならば、著者に尋ねてみようと思い、手紙を書いたが返事は無い。返事が無いのは「出典を見よ」との無言のメッセージと解釈し、国会図書館で探したが、出典は書かれていなかった。これは、確かに下田先生の歌なのだろうか。

今回、研究所からこの小林さんとのエピソードの執筆依頼が来た際、科学博物館に執筆許可の電話を入れた。丁度その時、『ミシンを識る—その構造発達と美』という企画展を開催中で(2015年2月14日で終了)、学芸員の齋藤有里加さんから、「1921年(大正10年)に出版された展示品の『裁縫ミシン全書』の3ページに確かに載っている」と教えて頂いた。早速、この本を見に、博物館に向かった。



『裁縫ミシン全書』表紙

見せて頂いた。文部省認定と記され、徳富蘇峰が題字、下田歌子が題歌とある。そして、確かに3ページ目に、下田先生直筆の歌が載っている。小林さんの先の謎一、この歌がいつ詠まれたのか一、は解明されたが、この本の著者である宗田覺とはどういう人物なのか一、何故、彼は下田先生に依頼をしたのだろうか。そして、この歌は、この本の為だけに詠まれた一、ということだろうか。



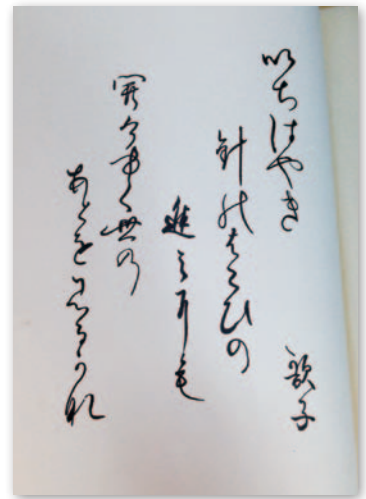
中表紙

日本に渡来したのは1854年（安政元年）、米国のペリーが第13代将軍徳川家定に献上した品の中に含まれていた。最初に扱ったのは、家定の御台所である藤原敬子（篤姫・天璋院）とされているⁱ。その後、一般家庭に持ち込んだ第一号は、「母への土産」として持ち帰ったジョン万次郎だと言われているⁱⁱ。

『裁縫ミシン全書』は、展示会の入り口に展示されていた。齋藤さんが、今回の展示の為に古本屋で発見したのだそうだ。許可を得て、中を

そもそも、ミシンが一般に広まるきっかけは、本縫いの特許を基本技術として、米国人アイザック・シンガーにより量産化されたことである。1851年のことだ。シンガーはミシンを“分割払い”で販売し、一般家庭に普及させた。

明治維新以降、近代化を推し進める日本に、所謂“文明の利器”が入って来るには時間が掛かったと思われるが、ことミシンに関しては量産化からほんの3年で入って来た。下田先生のこの歌は、西洋文明の象徴としてのミシンに、新しい時代の幕開けを重ね合わせている。展示されていたシンガー社の絵葉書を目にした瞬間、この歌は更に輝きを増した。歌については、その経緯など、未だ謎が残る。本文にお目を通し頂いた皆様の中に、ご存知の方があれば、情報提供を求めたい。



下田先生直筆の歌



シンガー社の広告絵葉書

i 東京農工大学科学博物館の展示パネルを引用。

ii アンドルー・ゴードン『ミシンと日本の近代—消費者の創出』みすず書房、2013年、p.18

常磐祭参加報告

下田歌子研究所 所長
湯浅 茂雄

実践女子学園下田歌子研究所は、昨年10月18日(土)、19日(日)に開催された第1回渋谷キャンパス常磐祭に参加した。本学の常磐祭としては58回を重ねるものであるが、渋谷においては2キャンパス体制となってから最初の常磐祭であった。日野キャンパスの常磐祭は例年通り11月の第2週の11月8日(土)、9日(日)に開催されたが、本年度よりキャンパスごとの常磐祭が開催されることになったのである。渋谷は学園が大きく発展した基礎を形作った地であり、文系学部の復帰後初めての常磐祭の開催に、研究所としても少しでも協力したいという思いからの参加であった。

会場は120周年記念館6階603教室を使用した。参加の趣旨および内容は、新設された下田歌子研究所の活動を紹介するとともに、創立者下田歌子および学園の歴史を分かりやすく伝えようとするもので、ここに渋谷の地に関する写真資料を絡めようとするものであった。内容は具体的には展示・講演会・DVD上映を柱とした。

展示はミニ写真展と題して、下田歌子・学園史関係の写真のほか、渋谷の昔と今がわかる写真を展示した。また以上の写真展示のほか、下田歌子の著作や学園史関係資料の展示も行い、来場者には解説を行った。

講演会は18日(土)の午後1回と19日(日)の午前・午後それぞれ1回の計3回、「下田歌子と実践女子学園」と題して、下田歌子研究所所長の湯浅が講演を行った。

DVDは18日(土)に4回、19日(日)に3回上映した。その内容は「オーラル・ヒストリー下田歌子～卒業生の証言～」(戸野原須賀子氏・白井喜美子氏・堤敏子氏・西田英子氏・鈴木カズ氏)、「実践女子学園創立70周年記念作品 私たちの学園」、「はばたけ! わが娘らよ～下田歌子の生涯～」の各内容を上映した。なかでも「70周年記念作品」はこの時代に学んだ卒業生にとっては貴重で懐かしい映像ということ



「下田歌子と実践女子学園」講演

で、上映時間以外にも上映のリクエストがあり、それにも応えることができた。

来場者は2日間で約170名であった。学生、卒業生の来場が多かったのはもちろんであるが、一般の方の中には2日間連続で来場される方もあった。また、学生が父母とともに来場する姿も目立っていたようである。

また、学生の来場で目立ったことは、大学、短期大学部を問わず、卒業論文や、それぞれの自由課題として下田歌子関連のことを取り上げたいということで来場した学生が複数いたことである。具体的な質問もあり、常磐祭以後も相談のやり取りが続いた。本学の実践入門セミナー等における自校教育が根付いてきた結果と考えられたし、常磐祭のような全学行事に研究所として参加した意義があったと思われることである。

今年度は諸般の事情から渋谷キャンパスのみの参加となったが、来年度においては日野キャンパスにおける常磐祭にも参加すべく準備を進めているところである。



ミニ写真展

下田歌子先生 について

I

窓日短歌会元同人
村上 廣元



牧野和子、2011年、小学館スクウェア

漫画本『きらりうたこ』

頭の大きい少女が、豊かな髪を桜色のリボンできりりと結び、正座をしています。着物は筒袖、帯は青地に白い桜の花、身に装ったものは、質素であるけれどきちんとしています。少女は、両目を大きく見開いて和綴りの書物に夢中です。愛らしく描かれています。漫画本『きらりうたこ』（牧野和子著小学館スクウェア平成二三年刊）の表紙絵こそ、本を読むことが大好きだった下田歌子先生（結婚前は平尾鉦さん）の少女姿だったのだとつくづく眺めてしまいました。そして一五〇年前にタイムスリップさせられて、漫画本を一気に読み終えました。

明治政府官吏の父上の平尾録蔵さんを頼りに、明治四年（一八七一）、鉦さんは、美濃国（現岐阜県）から上京しました。そして翌年、満一八歳の時に思い掛けなく後宮に女官として出仕することになりました。

薩摩藩の西郷隆盛（一八二七—一八七七）は、薩摩藩士の歌人八田知紀（一七九九—一八七三）を宮内省歌道御用掛に登用しました。そして弟子の一人の鉦さんが、女官に任命されました。この背景として、鉦さんの天稟と祖父以来の勤皇思想と幸運（翌年に八田師匠は逝去）とが、私には考えられます。

明治天皇の美子皇后（後の昭憲皇太后）は、初々しさのまだ残る「慧敏」（伝記の中での形容）な乙女の歌才を愛でられて、

「鉦、あなたの和歌にける思いには、いつも感心

させられます。これからは歌子と名のりなさい。歌の好きな歌子……良い名でしょう」

と仰せられました。後宮出仕後、二カ月での「歌子誕生」は、今日、親しく「学祖歌子」と景仰されている先生についての語り種であり、漫画本における白眉です。私にとっても最も印象的なエピソードでした。

先生の物心がついた明治初年から晩年の昭和一〇年代に到る時代は、日本の激動期で、大日本帝国の政府が、欧米先進国の文化の積極的摂取策と欧米列強に伍するための富国強兵策とを、強力に押し進めた時代であったとされています。その反面、現在とは比較にならない程、男尊女卑の封建的時代であったと批判されています。

漫画本では、先生が、女子も男子と同様に学問と教養とを身につけさせるため、教育を受けさせるべきであるという確固たる信念を貫いたことを称えています。先生の業績は、女子教育のみならず、女性の社会的役割の拡充にも及んだことを描き切っております。

『歌集 雪の下草』

昭和七年（一九三二）、喜寿の記念に著作集『香雪叢書』（全六巻、香雪は、後年の雅号）が実践女学校出版部から出版されました。第二巻が『歌集 雪の下草』です。蔓竜胆の表紙絵を、平福百穂（一八七七—一九三三）が描いています。百穂は、作品が郵便切手になった程の日本画家で、アララギ派の歌人。



蔓竜胆の表紙絵が美しい『香雪叢書』



私は、先生の所望（生家の家紋が笹竜胆）の絵であろうと想像を逞しくして、楽しんでいきます。百穂は、先生の歌集出版の翌年、旅先で急逝しましたから、表紙絵は、百穂にとっても記念すべき作品であり、私は、運命的なものを感じています。その序文を先生は、次のごとく謙虚に書き起こして、奥床しい心根を偲ばせています。

「此の歌集は、単に己れが幼少の頃より、ただ好きなるが故に、意の趣くに任せてうめき出でたるものを、時代を序でて並べたるものなり。」

しかし、四五〇ページに達する一巻は、短歌一二五一首のほか俳句・長歌・今様・漢詩を擁して、堂々とした詞華集です。その上、『明治文学全集』（筑摩書房昭和四一年刊）でも、『雪の下草（抄）』が光を放っているところから、先生が、明治文学史に輝く女流歌人の一人であることは、疑いありません。先生の短歌は、決してうめき出でたるものではなく、流麗な調べを奏でる品格のある歌で、それ程苦勞することなく詠じられた自然体作品である、というのが、私の読後の感想です。先生は、天性の歌人でした。

『下田歌子先生伝』

昭和十一年（一九三六）一〇月八日、満八二歳の天寿を全うされた先生のために、翌年に伝記編纂所が発足し、昭和十八年（一九四三）に、伝記が刊行

されています。しかし、実践女子大学図書館の閲覧用の『下田歌子先生伝』は、近代日本の偉人を網羅した『伝記叢書』の第六六巻であり、平成元年に別の出版社が同じ内容で刊行したものです。このことは、先生が近代日本の偉人として客観的な位置づけがなされている証左です。

東条琴台 幕末・明治の儒学者。江戸の人。亀田鵬齋・大田錦城らに学び、博覧強記で知られる。海防論に触れる「伊豆七島図考」を著し、幕府に咎められた。著「先哲叢談後編」など。（二七九五―一八七八）

『広辞苑』のこの人物は、先生の父方の祖父です。美濃岩村藩の平尾家の入婿でしたが、藩の学問と合わず、長男録蔵（先生の実父）を残し、二年で離籍させられました。しかし、その後も平尾家と交流があり、故郷を離れる際の先生の満一七歳の『東路の日記』は、冒頭で「東なる祖父君を訪ね参らせんとて……」と述べています。「自慢のお爺さま」と終生敬慕しておられたそうです。また、祖母平尾貞さん（琴台の元妻）は、先生を幼少時から武家の子女らしく厳しくしつけ、後年の後宮出仕の中での「先輩や後輩の嫉妬や敵意」（伝記の中での表現）に耐えうる精神力を植えつけたと、伝えられています。

（次号へ続く）

研究会・研修会報告

下田歌子研究所
浪岡 正継

第1回
研究会
発表『『泰西婦女風俗』を読む』
講演「下田歌子『東路の旅』に同行した高智文蔵」

下田歌子研究所の活動の一つとして、研究会開催がある。また、当研究所は、過去三年間のプロジェクト研究活動として開催された恵那市岩村の人々との交流会「歌子さんの集い」を引き継ぐ必要もある。そこで、第1回の研究会を下田歌子生誕の地岩村で開催することになった。

研究会の当日11月15日(土)は、あいにく朝からの大雨で新幹線が2時間近く遅れ、会場である岩村振興事務所には、東京からの研究員の大半が開催時刻の午後1時半までに到着できない状況となって開催が危ぶまれたが、15分遅れで事なきを得た。

研究会は、二部からなり、第一部は湯浅茂雄所長の発表『『泰西婦女風俗』を読む』、第二部は若森慶隆氏(いわむら一斎塾)の講演「下田歌子『東路の旅』に同行した高智文蔵」であった。

湯浅所長は、2013年度に学園の海外研修制度で一年間英国に滞在され、下田歌子が明治26年9月から明治28年8月までかけた欧米女子教育視察の足跡を、研究の合間に訪ねて来られた。今回の発表は、下田が帰国後『泰西婦女風俗』に著した見聞の内容紹介と見解について、これまでの調査の確認と共に所長自身の見聞の実感を加味したものとなった。

下田が訪れた場所や出会った人物で、分かっているものと解明されていないものを解析した後、下田の著作内容は、概ね事実を曲げておらず見聞したものを誠実に描写している、そういう風に著作を読むべきだとの見解を述べられた。当時のブライトンの海水浴場風景の写真や、下田が英国でテニスをしたなどの挿話は、具象的で参加者の興味を引いていた。



若森慶隆氏

若森慶隆氏は、岩村出身の儒者佐藤一斎や地元の歴史を研究されている方で、今回の講演内容は、下田歌子が明治4年に岩村から東京に出立した時の旅日記『東路の



湯浅茂雄所長の発表風景

日記』に出てくる同行者高智文蔵と、その娘鐵についての家系等の調査、侍屋敷図、また『東路の日記』で辿った旅の行程を、地元の研究者でなければできない、具体的な実地調査に基づいて講演された。たとえば、『東路の日記』の中で下田が第一日目に通じた「山田」という地名について、実は二つ考えられ、現在の恵那市山岡町馬場山田か、参勤交代で通った大名街道にある山田(現在の瑞浪市山田町)であるが、距離的な整合性から馬場山田であろうとの見解であった。これなど、文献でしか歴史を見ない研究者には及びもつかぬことである。下田が一日目に通じた馬場山田村から柿野村までの各村の家の件数や人口なども、統計資料から具体的な数字を示しておられた。その他、一日目の宿泊先である柿野村の「中屋」という旅館は今も同じ場所に民家が建っていること、三国山に建立された下田の歌碑や、柿野から拳母(現在の豊田市)へ至る道標等、江戸・明治の名残を肌で感じられるものを写真などで紹介された。旧暦明治4年4月8日から日本橋に到着する4月22日(推定)まで、下田一行が毎日のように30kmから40kmを歩いたとの話は、改めて旅の過酷さを想像させた。充実した内容だった。(参加者 25名)

第1回
研修会
下田歌子『東路の日記』の足跡を訪ねて

研究会の翌11月16日、マイクロバスを貸切り、恵那市在住の9名を含む19名で、『東路の日記』を辿る研修を行った。下田歌子一行は、一日目岩村を発ち、山田を通り柿野村(現土岐市)の中屋に宿泊している。二日目、三国山を望む峠を越え、かの「綾錦」の歌^{注)}を詠み、^{ころも}拳母(現豊田市)に至り母方の親戚と会い、岡崎の母の実家に宿泊する。この二日間の足跡を追う旅であったが、予期せぬ新しい知見も得ることができた。

注) 綾錦着て帰らずば三国山
また再びは越えじと思ふ

岩村から一時間程で、柿野に至る。途中の馬場山田には、山間の林に囲まれて整然と区画された美しい棚田が続いている。中屋跡が現在は民家なので、挨拶に伺ったところ、住家の稲垣様御夫妻が表に出て来られて、中屋についてお話して下さった。当時、中屋の庭には牡丹が沢山植えられていて、その一部が時を越えて稲垣家の庭に残っているのだという。「綾錦」の歌は、実は下田歌子が中屋に宿泊した時に詠まれたもので、詠んだ短冊を牡丹の木にくくりつけて残したと村の古老によって伝えられているとのことだった。成程、「綾錦」の歌は叙景でなく覚悟の歌であってみれば、前日に詠まれても不思議ではなく、また『東路の日記』には、三国山の峠を登る時、駕籠を利用したが揺れて吐気を催したとも記されている。恐らく、歴史的事実は、歌が先に詠まれたという伝承の方が正しいのだろう。



稲垣家に伝わる牡丹



三国山

柿野を後にして、近くの三国山山頂の「綾錦」の歌碑を訪ねた。歌碑の辺りは、キャンプ場の駐車場から近く意外に広いが、上り口を示す標識も見逃すくらい狭かった。歌碑を見学した後、100m程離れた展望台まで移動した道すがら、石仏が並んでいた。よく見ると半分程の仏には首がない。この異様な光景は、明治初期の廃仏毀釈によって破壊された仏が、寺などから此処に集められたからだという。展望台からの見晴しは、すばらしいものだった。右から恵那山、雪を頂いた南アルプス連峰、ぽつんと離れて

9月27日に噴火し57名の犠牲者を出したばかりの御嶽山が噴煙を風にたなびかせているのが一望できた。左方には、濃尾平野が広がり、名古屋駅のツインタワーもくっきり見える。天気良ければ、伊勢湾も眺望できるのだという。山には電波塔などの鉄塔が立ち並び視界を邪魔するのが残念であるが、この眺望は、一見の価値がある。是非お薦めしたい。

三国山を後にし、豊田市(挙母)に向かう。旧道を通り小原地区に至ると、紅葉と共に満開の桜並木が眼に飛び込んできた。四季桜といい、高さ3m程で小ぶりだが11月が一番の見頃だという。予期せぬ紅葉と桜のコントラストは、眼前に絶品の料理を並べられた感があった。



紅葉と四季桜

昼食を挟み、豊田市郷土資料館に立ち寄った。此処には、柿野道から挙母に至る江戸時代の道標が移設されている。挙母と岩村とは古代から関係が深く、矢作川を上り挙母で陸揚げされた塩や物資を運ぶ「塩の道」として繋がっていたと、教育委員会の森泰通氏が解説して下さいました。

最後の地、下田歌子の母房子の生地岡崎に至る。母の生家武久家については、分限帳などで名前が確認されるが、武家屋敷跡も繁華街に変貌して痕跡を留めていない。家康ゆかりの岡崎城を観光し、『東路の日記』二日間の足跡を訪ねる研修の旅を終えた。



岡崎城にて

講演会報告

「グローバル時代の女性の生き方 ——下田歌子がめざしたもの」

下田歌子研究所 主任研究員

伊藤 由希子

2014年11月1日(土)、中高キャンパス桜講堂にて、中学1年生を対象に「グローバル時代の女性の生き方——下田歌子がめざしたもの」というテーマで講演を行った。

今の時代をあらわすキーワードのひとつにグローバルということがあるが、日本人がもっとも強烈にグローバル化の波にさらされたのは、なんといつても、鎖国が解かれた後、明治から大正にかけての時期であり、その激動の時代に、世界に開かれたこれからの日本における女性のあり方を考えたのが下田歌子であった。

下田は、西洋のものとあれば何もかもありがたがってひたすらに真似をしていた明治初期の時代への反省と、実際に欧米を見て回り、西洋文明・科学の卓越性を痛感しつつも、それを日本にそのまま移入しても十分に機能しないであろうことを身をもって感じた経験から、これからの時代にふさわしい日本女性を育てるために、西洋文明にひたすら追随す

るのではなく、昔から現在までの、日本女性の長所と短所を細かく調査研究して、その長所を失わないようにし、そこに新しく入ってきた他の国の思想や文物のすばらしいものを加えることをめざした。いわば“温故知新”——これは言うは易く、しかし実際に行うは難い——の姿勢によって、グローバル時代の新しい女性像を考えようとしたのである。

この講演は「校祖調べ」の授業の一環として行われたもので、生徒たちからは後日、「今まで下田先生の人生や故郷・岩村については学んできたが、考えていたことや文章に触れたことはなかったので、学ぶことがたくさんあった」「下田先生が考えていたことを、自分も実践していきたい」「下田先生がめざしていたことを知り、素晴らしい人だとあらためて感じた」等の感想が寄せられた。

下田歌子研究所では、今後も研究成果を学生・生徒たちに積極的に還元していきたいと考えている。

下田歌子研究所ではこのたび、場という発想の持つ可能性、そして場において女性たちが担ってきた〈いのち〉をつなぐいとなみに注目されてきた清水博先生を講師にお迎えし、講演会を開催いたします。

詳細は下田歌子研究所 HP をご覧ください (<http://www.jissen.ac.jp/shimoda/>)。

みなさまのご来場をお待ちいたしております。

実践女子学園 下田歌子研究所 講演会

清水 博 (NPO 法人「場の研究所」所長／東京大学名誉教授)

女性と〈いのち〉の場づくり

「世界が大きく変わりつつあるこの時代に、
女性であることの意味を〈いのち〉と場から
新しく考えてみたい」(清水 博)

2015年2月26日(木) 18:00 - 19:30 (開場17:30)

実践女子大学渋谷キャンパス 創立120周年記念館 503教室

※先着85名/入場無料・事前申込不要

『ニューズレター』No.03

発行：2015年2月20日 発行人：湯浅茂雄 編集人：伊藤由希子 青井敦子 発行所：実践女子学園 下田歌子研究所
〒191-8510 東京都日野市大坂上4-1-1 電話・FAX：042-585-8945 E-mail：shimoda-ins@jissen.ac.jp

印刷：日野テクニカルサービス株式会社